

同志社女子大学 2017 年度春学期「授業に関するアンケート」総評

教育開発支援センター長 大西 秀之

はじめに

2017 年度より、授業に関するアンケートの見直しが行われ、その内容が大幅に変更されました。授業に関するアンケートは、これまでも何度か見直しが行われ変更を重ねられてきました。たとえば、直近では、2013 年度に質問を 15 項目から 10 項目に削減するとともに、ディプロマ・ポリシーに基づく DWCLA10 の獲得を問う質問が加わりました。こうした変更は、その時々を大学を取り巻く内外の要望・情勢に対応すべく、様々な試行錯誤の下に行われてきました。

今回の変更の目的も昨今の大学改革と多分に関係するものとなっています。まず重要な目的として、従来行われてきた個々の授業の改善に加え、ディプロマ・ポリシーに掲げる学科ごとの到達目標の達成度の測定があげられます。加えて、学生の学修行動の把握も昨今重視されてきています。このような目的のため、今年度の授業に関するアンケートから、「授業改善」、「学修行動」、「到達目標」の 3 区分を設け質問を行うこととなりました。もう一つの重要な目的として、アクティブ・ラーニングの重要性の確認があげられます。アクティブ・ラーニングに関しては、様々な考え方や取り組みがありますが、今回の改善では特に学生の理解度を確認しながら授業を進めること、フィードバックを丁寧に行うことなどを重視し、そのための工夫や実践がどの程度行われているか計測することを試みました。

上記の目的は、「質の保証」や「学習成果の可視化」など、現在大学教育に求められている一連の改革に関係するものとなっています。したがって、大学そのものの認証評価にもダイレクトにかかわる取り組みにほかなりません。このため、今後授業に関するアンケートは、個々の授業の改善というまでもなく、各学科のディプロマ・ポリシーに掲げられている到達目標の達成度を測るためのエビデンスとして、大学の認証評価に活用することも重要な役割となると考えています。

このような理念の下、今回の授業に関するアンケートから、個々の科目の学修行動と到達目標の達成度に関するデータを学科単位で集計し、それらのデータを学科全体として分析していただくことになりました。こうした分析は、ディプロマ・ポリシーの達成度をはじめ、学科全体として授業内容の現状把握と改善点の確認などを目的として行っていただくことを期待しています。

以上のような背景から、今回の「総評」は、単に授業の改善状況の総括ではなく、学科ごとの分析を踏まえた上で、到達目標の達成度を学科間で比較しながら分析することにより、本学の総合的な教育力そのものの評価となることを目指しました。今後は、「総評」の集計・分析結果が学科全体の改善に積極的に活用され、その結果として大学の認証評価にも寄与するものとなるよう、実績を重ねて行くことが不可欠になると考えています。

言うまでもなく、授業に関するアンケートは、基本的に学生の主観を問うものであり、決

して客観指標となるものではありません。授業に関するアンケートは、絶対的な指標などではなく、授業改善に向けその内容自体についても常に修正を加えて行く必要があります。そういった意味でも、各学科・各科目区分が今回のアンケート結果を、どのように評価されているかも重要な検討材料となります。これに加え、学科や科目区分によっては、学生の履修において必修／自由選択が異なるため、当然それが回答に大きな影響を及ぼしていると予想されます。このような背景を、各学科・各科目区分がどのように捉えられ、評価されているか把握することも、今回の主要な目的の一つとしました。

質問項目ごとの分析評価について

今回の授業に関するアンケート総評は、次の i から iii のステップを踏まえて作成しています。

- i. 授業に関するアンケートの集計は別冊「2017 年度春学期 授業に関するアンケート実施結果報告書」にまとめられています。その他、個々の科目（クラス）の集計は、当該授業担当者に配布されています。
- ii. 教員コメントを専任教員に限って全員に記載していただきました。教員コメントは、アンケートの質問項目ごとにコメントを書いていただく形式のものですが、個々の科目ごとではなく、教員 1 名につき 1 枚にまとめて記入していただいています。
- iii. 学科等の授業評価報告を各学科・科目区分の責任者の方に記入していただきました。各責任者は、当該学科等の個々の専任教員からのコメントや集計結果を基にして、学科等全体としての授業改善、学生の学習行動の把握、学科等としての到達目標の把握に努めていただきました。

以下の質問項目ごとの分析評価は、原則として次の 4 項目で構成されています。

- i. 教育開発支援センター長によるコメント
- ii. 各学科及び全学共通の各科目区分の責任者による当該学科等のまとめからの抜粋
- iii. 履修要項等に掲載された学生に対する質問項目の趣旨の説明
- iv. 当該質問についての学科等のすべての科目の平均値グラフ（原則として 4 点満点）

今年度の分析は、各学科等の責任者にとっても教育開発支援センターとしても試行錯誤のなかで行ったため、不十分な点も多々ありますが、今後の本学の教育力の向上のための参考にしていただければと考えています。

(1) 「授業実施に関する質問」の結果について

1. 授業内容はシラバスに合っていましたか

「Q1 シラバスとの合致」は、すべての学科・科目区分で「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が 90% を超えていました。この結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業でシラバスに沿った内容が提供されていたと評価できます。もっとも、いくつかの学科・科目区分の報告では、個別授業のなかに低い評価となった授業があり、改善の必要性が指摘

されてきました。また一部の授業では、受講者数などの諸事情から内容の変更を余儀なくされたため評価が下がった、という報告がなされてきました。アンケート結果から、本学学生にとっては、シラバス通りの授業が提供されていることが「当たり前」と受け止められていると推察されます。このため、どのような理由であれシラバスの変更が行われる場合は、当該授業の受講生に対し変更の理由を説明し、それを周知徹底することが求められている、との認識を共有することが必要になると思われまます。

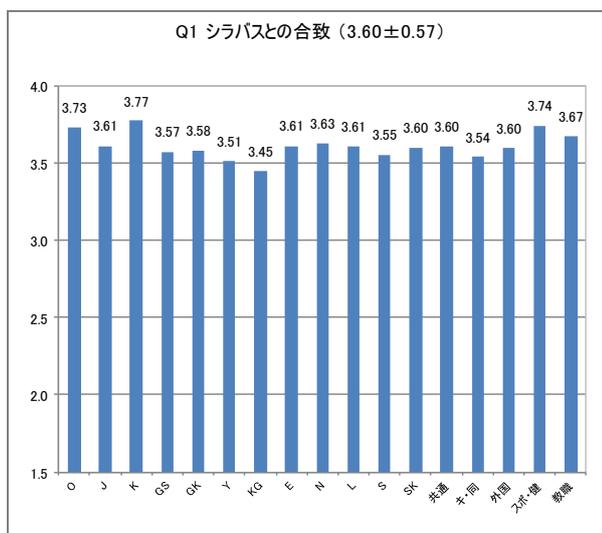
【学科等からの報告抜粋】

問題のある科目については原因を追求し解決したいと思う（音楽学科）。一部の担当教員からは、授業進行の流れなどを鑑み、必ずしもシラバス通りにならないこともあった（情報メディア学科）。本年度から始まった新カリキュラムに伴う新しい授業で、受講者数が想定以上に多くなった授業に関しては、やむをえず授業方法を修正しなければいけないケースが生じた（国際教養学科）。3年次は初年度の授業であり、学生の状況に合わせて若干変更した科目や嘱託講師の科目は、評点が低いことから、シラバス作成時からの調整や嘱託講師との調整が必要と思われる（看護学科）。社会情勢に応じてシラバスとは異なる内容を盛り込むことも必要な場合があるとの意見もあった（人間生活学科）。肯定的な評価（そう思う・ややそう思う）の合計が約88%で、多くのクラスで「そう思う」が最多の選択率であった。

「聖書A」は、どの担当者もクラスによって「そう思う」の選択率にばらつきが見られ、最大で20ポイント以上の差があった（キリスト教・同志社関係科目）。

【学生に対する質問意図（履修要項記載）】

正しく回答するためには、受講生も日常的にシラバスを参照していることが前提となります。授業進度などが若干でも修正されたかどうかということが問われているのではなく、シラバスに記載された重要な事項の実施についてどう感じたかを回答してください。



2. 受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか

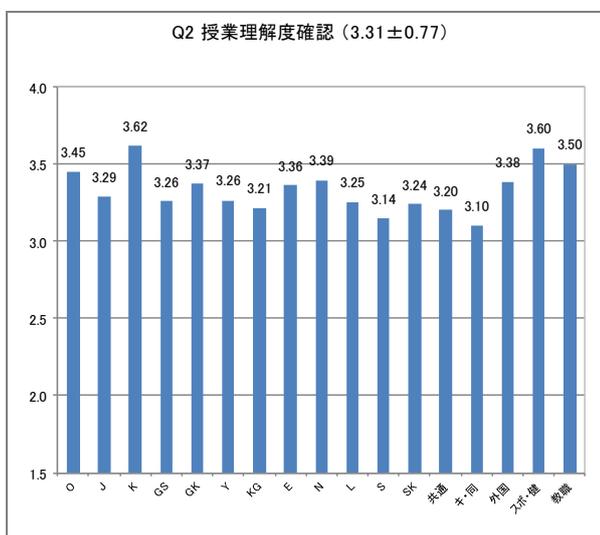
「Q2 授業理解度確認」は、すべての学科・科目区分で「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が70~80%以上となっていました。集計結果から、受講者数の多い講義形式が多い学科・科目区分では、「4 そう思う」の評価が下がる傾向が認められますが、これは多様な受講者が含まれる可能性が高くなることから、当然の結果と推察されます。今回の学科・科目区分からの報告では、様々な取り組みが行われていることや、その成否などが指摘されていました。理解度を確認しながら授業を行う方法は、授業形態・受講者数・学生の資質などにより、それぞれ異なることが予想されますが、今後とも試行錯誤を繰り返しながら、より良い方法を模索して行くことが不可欠になると思われまます。

【学科等からの報告抜粋】

限られた時間で一定の内容を扱う必要上、致し方のない部分もあると考えられるが、改良方法を考えたいと思う（音楽学科）。出席カードの自由記述欄にコメントや質問を記入させたり、アナライザーを使用して授業の理解度を把握するよう努め、受講者とのコミュニケーションをとる工夫をする授業が多かった（国際教養学科）。受講者数の多いクラスでは評価が低く、少人数の演習クラスでは高くなる傾向がみられた（社会システム学科）。すべての科目において理解度を確かめながら授業を進め、期末テストで最終確認を行っている（医療薬学科）。科目によりバラついている様子であるが、各教員は、授業内容・クラス規模等を勘案し、コメントペーパーやマナビーを導入して、理解度の確認に努めている様子がみられた（人間生活学科）。小テストやレポート課題など、受講生の理解を常に意識し対応した授業・実習・演習を行った科目の評価は高かったようである。実験・実習科目ではほとんどの科目で学生の理解度を確かめながら、授業が進められていた。科目によっては学力差が大きいため、理解度も差が大きいものがあった（食物栄養科学科）。

【学生に対する質問意図】

受講者が多数の場合と少数の場合とでは、理解度を確かめる工夫は異なってきますが、例え受講生が多い場合でも何らかの工夫がなされていたかどうかについてどう感じたかという観点で回答してください。もちろん、受講生としてひとつひとつ理解しながら学習を進めるといふ心構えを持っていないければ正しい回答は困難になります。



3. 授業レベルは自分に合っていましたか

「Q3 授業レベル」は、すべての学科・科目区分で「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が70～80%以上となっていました。集計結果から、国家試験対策など一定水準の知識の習得が求められる一部の学科では、「4 そう思う」の評価が下がる傾向が少し認められますが、これも授業の目的が反映している結果かと推察されます。またそうした傾向は、当該学科からの報告でも指摘されていました。授業の目的から、レベルの調整が難しいケースに関しては、カリキュラム全体や授業外でのフォローなどの取り組みも必要になるかと思われます。

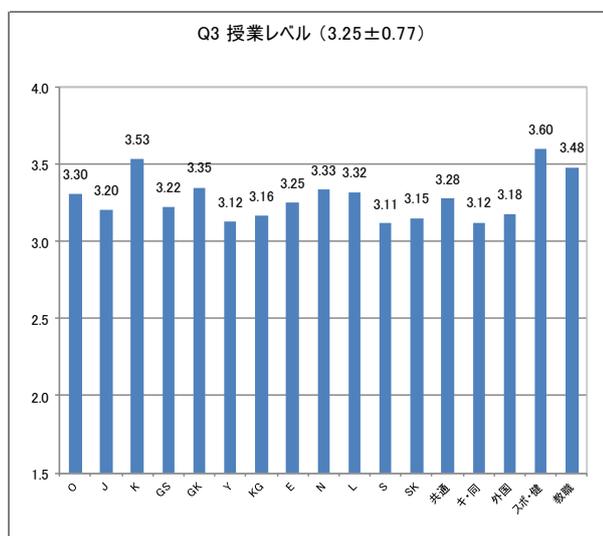
【学科等からの報告抜粋】

一部の授業に否定的回答があったが、既に能力別のクラスを設けたりして対応しており、あとはよりきめ細やかに学生たちの能力を見極め、適切に配分する必要があると考える（音楽学科）。平均して約7.5割以上の受講生が授業レベルは合っていると答えている。教員も意識して学生のレベルにあった授業を心がけている。更に努力を促したい（国際教養学科）。

大規模クラスでは個別の達成度の確認が小規模クラスに対して難しく、レベル設定についても人数が多いほど難しくなるということが授業担当者から指摘されている。平均値に加えてクラス規模との関連など、丁寧な分析が必要と考えられる（社会システム学科）。すべての学生のレベルに合った授業をするにはもっと教員及びクラスを増やすべきである（医療薬学科）。必修科目は、看護師国家試験受験資格の指定規則に位置づけられる科目でもあるため、レベルを学生に合わせるのではなく、到達度をあげるような工夫が必要と思われる（看護学科）。全学平均より評点が高く、おおむね合っていたと言える（日本語日本文学科）。科目により多様な結果であったが、どのレベルに合わせて授業を実施するかは、教員にとって大きな課題であると思われる（人間生活学科）。「自分に合っている」授業レベルがいいとは限らない。教員の授業レベルを引き下げるのではなく、授業のレベルに学生が合わせることも必要と考える（食物栄養学科）。肯定的な評価の合計が約75%であった。必修の「聖書A」で、「そう思う」の選択率が最大59.1%、最小10.4%と大きな差が見られたが、肯定的な評価の合計では差は減少している（キリスト教・同志社関係科目）。肯定的な評価の合計が約94%であり、大半のクラスで否定的な評価は皆無に近い（スポーツ・健康科目）。肯定的な評価の合計が約81%であった。習熟度別クラスが一定の効果をあげていると考えられる（外国語科目）。

【学生に対する質問意図】

理解しようと最大限努力した上での率直な感想を回答してください。



4. 教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか

「Q4 双方向性」は、すべての学科・科目区分で「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が70~80%以上となっていました。集計結果から、受講者数の多い講義形式が多い学科・科目区分では、「4 そう思う」の評価がやや下がる傾向が認められますが、これは受講者の人数により取り組みの方法にどうしても制約ができることから、当然の結果と推察されます。ただし、アンケート結果から、本学学生にとっては、双方向的な授業が特別なものではなくなくなってくると推測されます。また学科・科目区分の報告でも、積極的に双方向性を意識した様々な授業実践が試みられていることが、具体事例を交え少なからず提示されていました。このため、各授業担当者は、どのような授業形態であれ、双方向性を意識した工夫を盛り込むことが、今後ますます求められるようになると思われます。

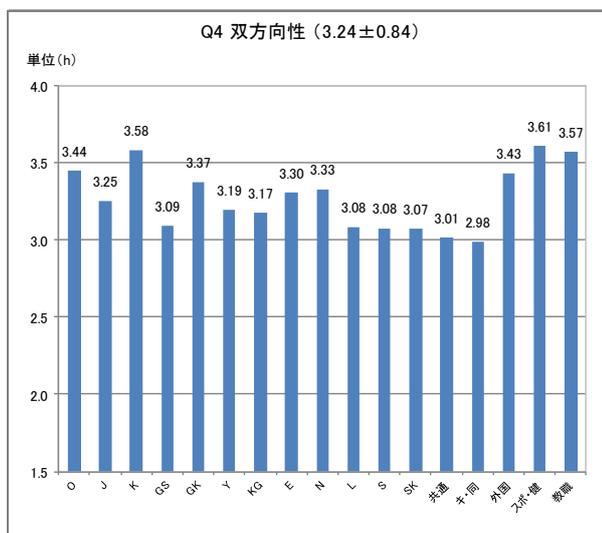
【学科等からの報告抜粋】

教員一人ひとりの工夫が感じ取れる。コミュニケーションを意識している教員が多い（情報メディア学科）。講義科目に関しては、教員は極力双方向の授業を意識しているが、より

一層の努力が求められるケースがあった。想定以上に受講者数が増えた選択講義科目については特に教員中心の講義形式になりがちで、さらなる努力が必要である（国際教養学科）。高評価のクラスでは、その理由として、演習クラス等の少人数クラスであったこと、また授業上の工夫としてのコメントペーパーを用いたフィードバック、マナビーの活用などの理由があげられている。一方、授業担当教員のコメントからは、入門科目よりむしろ専門性の高い科目で双方向的な学習形態による履修効果が高いことが指摘されている（社会システム学科）。スモールグループディスカッションを取り入れ、学生同士の話し合いの中で答を導く授業を取り入れている。しかし、覚えなければならぬ項目が非常に多く、知識のない状態でのスモールグループディスカッションなどのアクティブ・ラーニングの導入は、国家試験の合格率を下げる恐れがあり、時期を見て行っている（医療薬学科）。嘱託講師によるオムニバス科目や講義型の授業での評価が低かった。知識の教授のため、講義中心で授業進行となる科目もあるが、小テストの実施や授業中に口頭での解答を求めるなどの工夫の余地はあると思われる。いつでも個別指導をする旨伝えていた科目でも、評価が低かったことから、学生と教員の認識に差が生じていることを理解した上での対応が必要であると思われる（看護学科）。実験・実習科目では実験台を巡回することや、班のメンバーとの意見交換、グループでの発表など双方向の授業がやりやすく、評点も高くなった。講義科目では、学生への問かけや課題へのコメント、自由記述欄への記載、学生の発表など双方向への工夫を取り入れている授業に関しては、評点が高くなった（食物栄養学科）。肯定的な評価の合計が約70%であった。登録者数が100名を超す講義科目でも、ほぼ全てのクラスで肯定的評価が半数を超えていた（キリスト教・同志社関係科目）。

【学生に対する質問意図】

受講者が多数の場合と少数の場合とでは工夫内容はまったく異なってくると思われませんが、例え受講生が多い場合でも何らかの工夫がなされていたかどうかについてどう感じたかという観点で回答してください。



5. 提出物に対するフィードバック（採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など）は効果的に行われていましたか

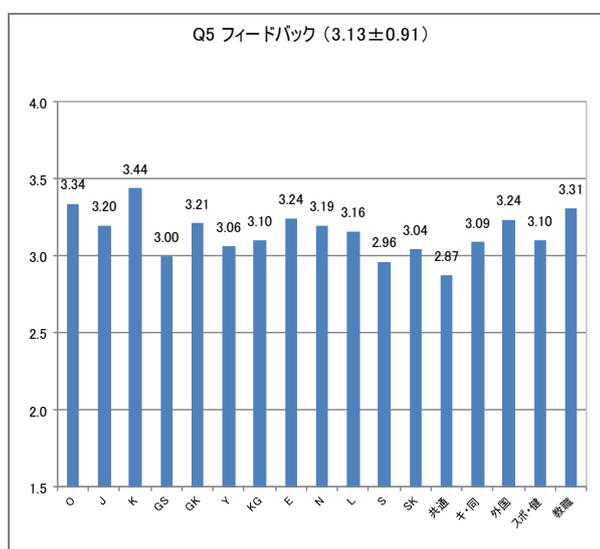
「Q5フィードバック」は、「4そう思う」と「3ややそう思う」の合計が50%前後～80%と学科・科目区分でバラつきが認められました。この結果は、受講者数や授業形態によって取り組みに様々な制約ができることが反映していると推察されます。そうした状況に対して、学科・科目区分の報告では、積極的にフィードバックを意識した試みが行われていることが、具体事例を交え少なからず提示されていました。もっとも、フィードバックは、各授業担当者にとって負担増となるため、どうしても出来ることに限界があり、今後はTAやSAなどの授業補助を積極的に活用することが必要になると考えられます。

【学科等からの報告抜粋】

マナー操作に習熟していない教員があり、早急にそれは解決されるべきであると考えられる（音楽学科）。出席カード、マナーなど、フィードバックを意識している教員が数多く見受けられた（情報メディア学科）。評価の高い科目では、コメントペーパー、小テストのフィードバック、反転学習の導入などの工夫があげられていた（社会システム学科）。提出物にコメントを詳細に記載して、返却している科目についても評価が低いことから、個別の提出物に対するフィードバックについては、コメント方法やタイミング等、工夫や配慮が必要と思われる（看護学科）。実験や実習レポートはその都度採点し、提出翌週に間違っただ部分がある人に、コメントをつけて返却し、再提出を求めた。この方法により実験や実習レポートの書き方を向上させることができた。講義科目でも、提出物あるいは小テストにコメントを書いて返却した場合は評価が高くなった。レポートで間違いの多い箇所について、誘導式の設定プリントを作成して配布し、同じ実験班の他のメンバーとディスカッションさせた上で記入したプリントを時間内に提出させ、添削している。提出物に関しては、実験実習科目、講義科目ともにコメントを書き、返却を望む声が多く、そのようにされている科目については評価が高くなった（食物栄養学科）。

【学生に対する質問意図】

受講生もフィードバックの重要性を認識し事後学習にも力を入れてほしいという願いが含まれています。そのような努力をした上で教員側からのフィードバックが効果的であったかどうかを回答してください。



6. 言葉による説明だけではなく、受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか

「Q6 理解促進工夫」は、すべての学科・科目区分で「4 思う」と「3 やや思う」の合計が 80～90%以上となっていました。この結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業で言葉以外によって理解を促す工夫が行われていたと評価できます。これはマルチメディア機器をはじめとする、授業補助機材の活用などが、受講生にも担当教員にも一般化したことの反映であると思われます。もっとも、このような状況であるからこそ、一部の個別授業のなかに低い評価となった授業があり、改善の必要性が指摘されていました。その他、Q4の双方向性やQ5のフィードバックとの関連性で、いくつかの工夫や取り組みの具体事例の報告がありました。こうした方向性は、今後全体で意識を共有し推進して行くことが必要になると思われます。

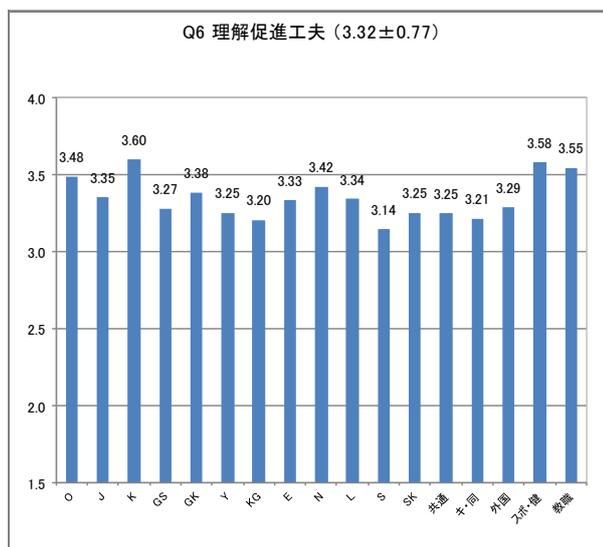
【学科等からの報告抜粋】

一部の授業に否定的回答が多く、改善の努力が必要であると考えられる（音楽学科）。演習科

目は、評定が高い傾向にある。講義型科目については、映像を取り入れるなどの工夫は可能と思われる（看護学科）。全学平均より評点が高く、おおむね工夫されていたと言える（日本語日本文学科）。多くの授業において、教員側は工夫を凝らしているように思われるが、受講生に十分に伝わっているか、という点においてはさらなる工夫が必要な場合もある（人間生活学科）。ほとんどの講義・実験実習科目で教科書を補うため、プリントの配布、ビデオの活用、スライド、マナビーの活用がされていた。実験科目ではデモンストレーションや図による説明などの評価が高かった。授業と実習・演習が連動して行われているので、受講生の理解を双方で確認し、補完し合っていた（食物栄養学科）。

【学生に対する質問意図】

図、表、写真、映像、模型などが効果的に使われていたかという観点から回答してください。受講者側の理解しようとする意欲が前提にあることは言うまでもありません。



7. 自主学習を促す工夫がなされていましたか

「Q7 自主学習促進工夫」は、「4 思う」と「3 やや思う」の合計が 50%前後～80%以上とバラつきが認められたものの、ほとんどの学科・科目区分で 70%前後の結果となっていました。この結果から、受講者数や授業形態によって取り組みや工夫が異なることが推測されるものの、全体的な傾向として、ほとんどの授業で自主学習を促す工夫が行われていたと評価できます。こうした結果は、Q4・Q5・Q6とも関連するものであり、各担当教員の様々な工夫や試みによって学生に自ら考える機会が提供されていることの反映と推察されます。昨今の入試改革によって、初等教育から高等教育までの学校現場で、自ら思考する力を養うためのアクティブ・ラーニングの導入が急速に進んでいるなか、大学として今後より一層の取り組みが求められる課題になると考えられます。

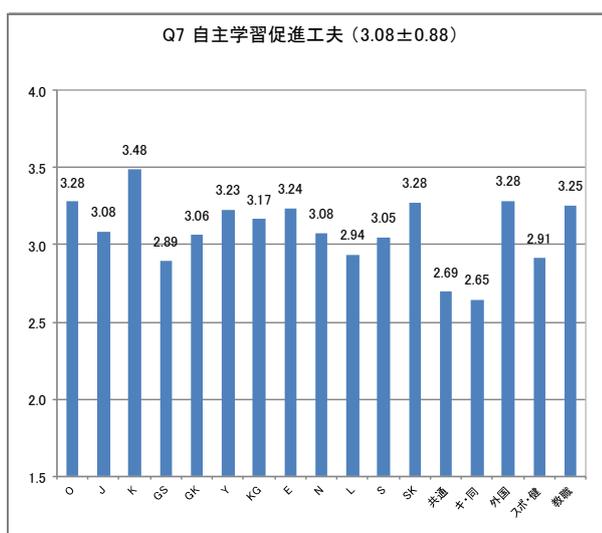
【学科等からの報告抜粋】

多くの授業では、授業の合間に確認テストを取り入れ、学習を促すことを行っている。テストをするといえおのずと学習効果が現れる。これを授業中に行わなくてはならないので本来のやるべき授業が制限されてしまう（医療薬学科）。看護技術に関する自己学習は、プラクティカルサポートセンターの環境を整備し、積極的な活用がみられる。一部、他科目の進行との関係で、学習時間の確保が困難な時期もあったため、学科科目での授業進行の調整は必要と思われる。看護技術以外で演習を伴う科目は、理解度を深めるためにも復習、自己学習を促す工夫が必要と思われる（看護学科）。講義科目ではノート作成を促し、ノートのまとめ方などにコメントを書いたり、小テストを行うことで自主学習を促せていた。授業

では、予習・復習を学生に積極的に勧めているが、自主学習を促す工夫はレポート課題だけになっていた。実習・演習においてはレポートを課しており、また予習しなければ実験を誤ることがあり、自主学習が促されていた（食物栄養学科）。

【学生に対する質問意図】

受講生の自主的な学習意欲を高める工夫やモチベーションを高める工夫がなされていたかどうかについてどう感じたかという観点から回答してください。



8. 工夫してほしいと思ったことを選んでください (複数選択可、なしも可)

「Q8 工夫してほしい項目」は、パワーポイント・話し方・配布資料などで、ほとんどの学科・科目区分で類似した結果となっていました。これらの項目は、本学の受講生にとって学科・科目区分更には授業形態の違いを超えた、改善要求の対象として評価されていることが窺われました。これに対して、マナビーや教科書は、学科・科目区分で比較的数字に差異があり、それぞれの授業の形態・実践・目的などを反映している、と推察されます。実際、学科・科目区分からの報告では、同じような数値でも、それぞれ受講生からの要望に違いがあることが読み取れます。なお残りの項目では、私語対応よりも公平性に対する数値に違いが認められました。また公平性に対する要求は、比較的少人数授業が多いと予想される学科・科目区分で一部高くなる傾向が認められることから、むしろ大人数による講義形式よりも少人数で行う演習形式の方が、教員や受講生同士の関係性が密になることが反映している可能性が指摘されます。こうしたことなどから、Q8の各項目の結果は、授業形態ごとの運営の参考にもして行くことができると思われます。

【学科等からの報告抜粋】

「小テストの正答を配布してほしい」、「ノートを取りきれない」、「教科書がもったいない」など、春秋開講の授業に関しては正答を配布することをしない場合もある。また教科書については、反転授業の意図を理解していない学生もいるようであるが、要検討(国際教養学科)。パワーポイントを使用する講義が多い。しかし、パワーポイントの使用は教員には便利であるが、学生にしてみると知識の定着には至らない。知識の定着にはある程度の期間をおいた繰り返しの試験(再試験)が必要である。また、パワーポイントの使用よりもノートを取らせるためにパワーポイントを板書に切り替える教員も増えている(アメリカではパワーポイントによる授業は学習効果を高めないことが報告されている)(医療薬学科)。「パワーポイント等」の選択率が21.9%で最多であった。「聖書A」の一つのクラスでは「私語対応」の選択率が28.9%と際立っているが、同じ担当者の他のクラスでは登録者数がより多いに

もかかわらずとくに問題がなく、受講生の態度により環境が変わってくるのが伺える（キリスト教・同志社関係科目）。

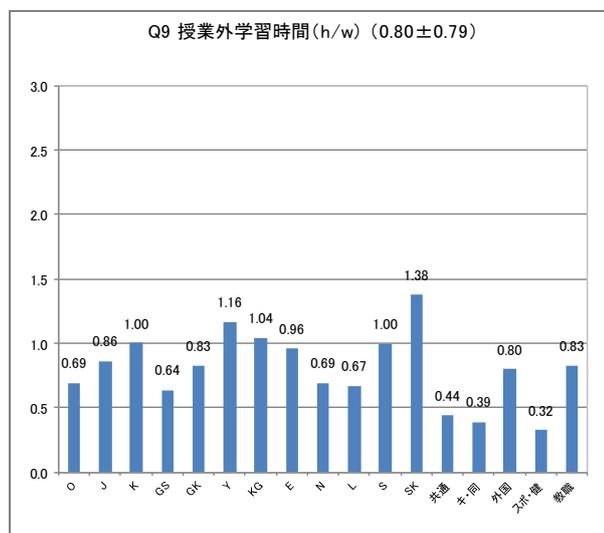
(2) この授業の学修行動に関する質問結果について

9. この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらいの時間をかけましたか

「Q9 授業外学習時間」は、まず国際教養学科、医療薬学科、看護学科、英語英文学科、食物栄養科学科管理栄養士専攻を除く学科で、30分未満が50%前後～60%となっていました。また外国語科目を除く科目区分では、30分未満が80%前後～90%となっていました。まずこの結果は、学習時間が短い学科等では講義形式の授業が多いことと、また相対的に学科で学習時間が長くなっている学科等には演習形式などの授業が多いことが反映していると思われる。一方、学習時間が長い5学科1科目区分は、学習しなければ単位を取ることが難しい授業内容が多いと思われる。授業外学習の必要性に関しては、従来から大学教育に指摘されている課題であるため、最優先で改善を考えるべき課題であると考えています。もっとも、学習時間に関しては、ただ闇雲にテストの機会や課題を数多く出すことで改善すべき問題ではなく、どのような目的でどんな学習を受講生に取り組んでもらいたいのか、当然授業ごとに異なることと思われるため、今後議論して行くべき課題であると思われます。

【学科等からの報告抜粋】

全学平均 0.80 に対して 0.64 と低かった。演習科目での時間は長く、大規模クラスほど予習、復習、自主学習時間が短くなる傾向が伺える。特に大規模クラスでの自主学習を促す工夫が課題とされる（社会システム学科）。講義中に確認テストを繰り返す授業では学修時間が長くなる。単純に学習時間を他学部他学科のクラス当たりの学習時間とは比較は出来ない。単に講義単位で学修時間をアンケートすることには何の意味も見出せない。また、学習時間は必要に迫られて伸びてくるのが実態で、6年次の薬剤師国家試験の対策として位置づけられている薬学特別演習bの1つのクラスで学習時間が他学部に比べて突出するのは、勉強しなければならない時期のアクティブ・ラーニングであるといえる（医療薬学科）。学生は、多くの課題があると言いなながらも、平均の授業外時間換算は1週間あたり1時間と、医療薬学科や管理栄養士専攻科目に比べて少なかった。シラバスに予習内容を記すだけでなく、授業ごとに、予習内容や復習内容を説明し、次回の授業の準備を高めるための工夫が必要と思われる（看護学科）。全学平均より低く、例年の事ながら改善の必要性がある（日本語日本文学科）。レポート課題が重いものは学習時間が長く、そうでないものは少ない傾向にあり、強制されないと学習しにく



い状況にある。早い時期から、定期試験で確認する事柄（到達目標）を提示しても、十分学習時間をかけて準備することができない学生も少なからずいる（食物栄養学科）。「英語講読」と「薬学英语」で比較的長い学習時間が取られているように見受けられた（外国語科目）。

【学生に対する質問意図】

自主学習には、この科目のために意図的に行ったすべての行動が含まれます。十分な授業外学習を行ってほしいという願いが込められています

10. あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか

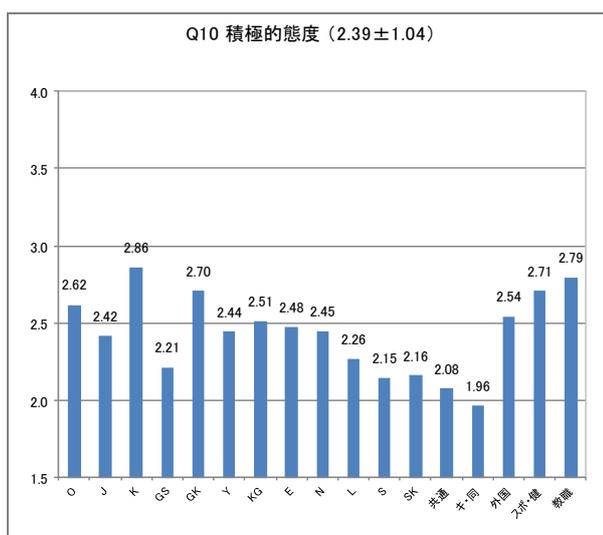
「Q10 積極的態度」は、「4 そう思う」と「3 ややそう思う」の合計が20%~60%と学科・科目区分でバラつきが認められました。この結果は、受講者数や授業形態による取り組みのあり方などが反映していると推察されます。また注目すべきこととして、Q 4 双方向性の工夫では、どの学科・科目区分も70%を超えていたにもかかわらず、比較的大きな差異が出たことは、双方向性の取り組み内容のみならず、その機会の回数などが結果として反映したと推察されます。こうした異なる質問項目をクロスチェックすることで、授業改善の方向性を探っていく必要があると思われます。

【学科等からの報告抜粋】

授業の性質上、学生たちに多くの発言の機会が与えられない場合もあるだろうが、これも授業後であったり、それ以外の機会でも、より積極的に学生たちに意見や質問をする意欲を与える工夫も必要である（音楽学科）。ペア活動やグループ活動を常に取り入れている授業が多く、学生が意見を述べやすい環境づくりが整っている授業が多い。質的に高い意見交換ができる工夫を更に進めていく（国際教養学科）。授業科目により異なるが、教員は学生が意見を述べたり質問したりする機会を増やす工夫を心掛けていると思われる（現代こども学科）。全学平均よりは高いが、より一層の改善が必要である（日本語日本文学科）。実験・実習科目では、意見を述べてもらう機会も設けることができたが、講義科目では基礎科目や資格にかかわる必修科目は教える項目が多く、意見を述べてもらう時間を取るのには難しかった。質問は大歓迎だが、質問に来る人が残念ながら少なかった（食物栄養学科）。

【学生に対する質問意図】

授業中の発言だけではなく、授業（教室）外での質問や、マナーを使って発言したことも含めて自己評価してください。



11. あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習を更に深めたいですか

「Q11 関連分野学習意欲」は、キリスト教・同志社関係科目を除く学科・科目区分で「4そう思う」と「3ややそう思う」の合計が70%前後～80%となっていました。この結果から、全体的な傾向として、ほとんどの授業で本学学生の学習意欲を高める内容が提供されていたと評価できます。なおキリスト教・同志社関係科目に関しては、学科を超え全学共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われます。ただそれでも40%を超える結果は、受講生に本学の理念が伝わっている反映ではないかと思われます。むしろ、このキリスト教・同志社関係科目での学びを、各学科・科目区分で如何に継承して行くかは、本学全体のディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにかかわる重要課題であると認識しています。

【学科等からの報告抜粋】

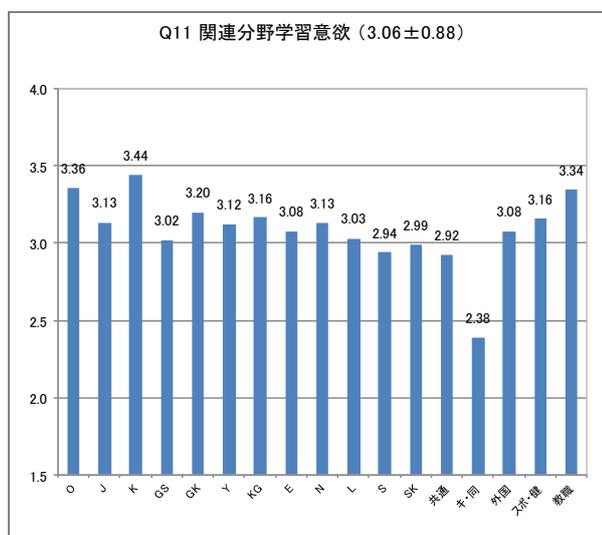
全体に高い割合で肯定的回答があり、喜ばしいことである。なおいっそうの学習意欲促進に向けて努力して行きたい（音楽学科）。必須項目以外の科目で、学習を更に深めたいとする評価が高い傾向が指摘された。また、専門基礎演習、応用演習、卒業研究等の演習科目でも評価が高かった（社会システム学科）。学生はどうしても国家試験対策に固執しがちで、学習を深める（応用まで学習する）というより、国家試験を解けるスキルを望みがちであった。知的好奇心を刺激する授業の工夫を行いたい。実験・実習科目では、学習を深めたいと回答している学生が比較的多かった（食物栄養学科）。

【学生に対する質問意図】

授業の分野の重要性や面白さが分かり、更に学習を深めようとしているかどうかを回答してください。

12. あなたがこの授業を履修した理由は何ですか（複数選択可）

「Q12 履修理由」は、6学科・科目区分で「授業内容」の選択率がトップで50%を超えていました。これに対して、これ以外の11学科・科目区分の「授業内容」の選択率は、英語英文学科とスポーツ・健康科目で40%であり、それ以外6学科・3科目区分は10～30%でした。また「授業内容」の採択率がトップでなかった7学科・科目区分の選択率のトップは「必修」と「資格」でした。もっとも、こうした結果は、十分予想されたものではありません。ただシラバスで「授業内容」をしっかりと説明することは、「必修」が少ない学科・科目区分はいうまでもなく、「必修」が多く「資格」取得を目指す学科・科目区分においても重要になると考えられます。というのは、「授業内容」の説明は、積極的かつ能動的な授業の履修を促すのみならず、必修や資格取得を履修の目的とされる授業



こそ、その内容を受講生に明示することが必要になると思うからです。

【学科等からの報告抜粋】

必修以外は、授業内容という回答が多く、喜ばしい（音楽学科）。授業内容で選んでいる場合が多く、良好な結果である（日本語日本文学科）。科目により多様な回答であったが、総数を見れば、授業内容で履修を決めた学生が多く、本学科の特性を考えると自然な回答結果であると思われる（人間生活学科）。「授業内容」の選択率が58.9%と最多で、他の科目区分と比較して著しく高い。これは科目区分の位置付けから考えて当然の結果と言える。「先輩・友人の勧め」の選択率が19.4%で、他の科目区分と比較して著しく高い（共通学芸科目）。

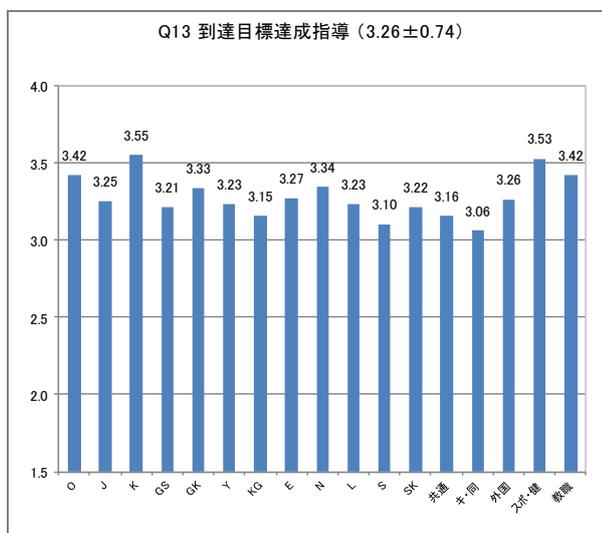
（3）この授業の到達目標に関する質問結果について

13. 到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか

「Q13 到達目標達成指導」は、すべての学科・科目区分で「4 思う」と「3 やや思う」の合計が70～90%以上となっていました。集計結果から、担当教員が授業の到達目標を的確に示すとともに、それを受講生の多くが比較的よく理解できていたと推察されます。もっとも、この結果は、単に授業内での説明のみならず、授業実施に関するQ1～7の工夫や取り組みの蓄積として得られるものと思われます。そういった意味で、各授業担当者は、受講生の資質や要望を見極めながら適切に対応した授業を行うことが、今後とも求められると思われます。

【学科等からの報告抜粋】

授業の冒頭また各授業中に到達目標を意識するような指導を心がけている教員も複数おり、そのような授業では学生も意識的に授業目標を持っていることがうかがえる（国際教養学科）。評価の高い科目では、授業のポイントを明確に授業時に学生に伝える等の指導法があげられた（社会システム学科）。薬学教育コアカリキュラムにより到達目標が定められている。教員はそれに則って授業を組み立てている。学生には入学当初コアカリキュラムを手渡しているが、それを認知しているかどうか疑問である（医療薬学科）。この質問の評定が低い科目は、Q14の質問の評定も低い。評定の低い科目では、到達目標を学生と共通認識することや、授業の中間や後半における到達度の確認が必要と思われる（看護学科）。講義科目と実験・実習科目での傾向はみられず、平均すると全学と同等であったが、ばらつきがみられた。講義科目では、レポートや資料配



布・小テストが効果的にできているものもあった。実験・実習に関して、個人指導ができたことが評価されていたと思われる。実験科目での高評価は、Q4の指導巡回を丁寧に行ったことと連動していると思われる。Q14と人数にするとほぼ同数の「わからない」と回答する学生がいる。到達目標を意識せずに受講しているのか、あるいは、到達目標の意識自体していない学生がいるように思う（食物栄養学科）。肯定的な評価の合計が約88%であった。担当者や科目により評点分布に大きな差異が見られた（スポーツ・健康科目）。肯定的な評価の合計が約83%であった。担当者や科目により評点分布に大きな差異が見られた（外国語科目）。

【学生に対する質問意図】

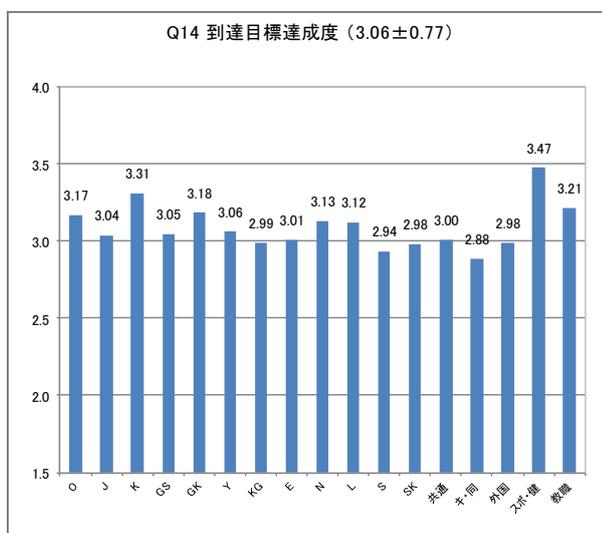
回答の前提として、受講生も常に授業の到達目標を見失わないようにしてほしい、到達目標達成のために努力してほしいという願いが込められています。その上での感想を率直に回答してください。

14. あなたは到達目標を達成できたと思いますか

「Q14 到達目標達成度」は、キリスト教・同志社関係科目を除く学科・科目区分で「4 思う」と「3 やや思う」の合計が70%~80%となっていました。この結果は、Q13と関連しています。つまり、担当教員が到達目標を的確に示し、それを受講生も理解していたからこそ得られた結果と推察されます。むろん、どれほど受講生が理解できていたとしても、到達目標の設定が適切でなければ達成という評価が得られることはないため、各担当教員が受講生を目標レベルまで導く授業を行った結果の賜物と思われます。なおキリスト教・同志社関係科目に関しても、「4 思う」と「3 やや思う」の合計が60%であることから、十分に到達目標の達成が果たされていたと評価できます。Q11でも指摘したように、キリスト教・同志社関係科目は、本学の理念を伝える教育であるため、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーにかかわる重要課題であり、各学科・科目区分での継承を考えて行く必要があると考えています。

【学科等からの報告抜粋】

何が到達目標であるかはっきりと学生に認識させることが先決である（医療薬学科）。全学平均より評点が高く、良好な結果である（日本語日本文学科）。概ね良好な結果であった（人間生活学科）。肯定的評価の合計が約62%であった。科目や担当教員による大きな差異や傾向は見出せなかった（キリスト教・同志社関係科目）。肯定的な評価の合計が約68%であった。担当者や科目により評点分布に大きな差異が見られた（共通学芸科目）。



【学生に対する質問意図】

到達目標が複数ある場合でも、全体としての達成度を率直に自己評価してください。

15. DWCLA10 の内、この授業の履修を通してその獲得や向上に役立ったと感じられるものをすべて選んでください

「Q15 DWCLA10 の獲得」は、ほとんどの学科・科目区分で「分析力」と「思考力」が高い選択率となっていました。この2項目は、ある意味で学習として基本となる能力であるため、当然の結果と思われます。これに対して、「想像力」・「プレゼンテーション力」・「コミュニケーション力」は、受講生が少人数や演習系の授業が多いと推察される学科・科目区分で選択率が高く、逆に必修の多い学科・科目区分で選択率が低くなる傾向が認められました。この結果から、授業形態や受講者数が項目の選択率にある程の度関係している、という予想されていたことが確認できました。残りの5項目のなかで、「思いやる力」に関しては、現代こども学科・看護学科・キリスト教・同志社関係科目・教職科目などで高い選択率を示していましたが、これは授業の目的を反映した結果であると思われます。なお「リーダーシップ」・「思いやる力」・「変化対応力」・「自己管理能力」・「自己実現力」の選択率が低くなっていますが、DWCLA10 の習得はカリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーに深く関係することから、カリキュラムを検討し全体の習得を達成できる授業を配置して行く必要があると考えています。

【学科等からの報告抜粋】

昨年もそうだったが、リーダーシップが少ないのは、やはりレッスン以外での参加型授業が少ないのが原因であろう。しかし、これもアクティブ・ラーニングの導入により、少しずつ改善されている（音楽学科）。DWCLA10 の中で、特に、思考力、分析力が高まったとする回答が多かった。この傾向は、全学平均とも一致する。また、創造性、コミュニケーション力、リーダーシップ、思いやる力、変化対応力、自己管理能力、自己実現力に関しては、全学平均を上回っており、社会の中で幅広い領域において包括的に活用し得る汎用的技能を高めるとする学科の教育理念が反映されているものと考えられる（社会システム学科）。分析力・思考力などの数値が高いが、学科の性質上、当然であろう（日本語日本文学科）。DWCLA10 の獲得・向上については、学科ごとに特性（違い）が出て当然とも思われるが、「創造力」や「思いやる力」の回答が全学よりも高く、「リーダーシップ」が低いのは本学科の特性であるとも言える。「コミュニケーション力」や「プレゼンテーション力」がやや低い点については、今後の工夫が望まれる（人間生活学科）。実験科目では、「分析力」「思考力」「コミュニケーション力」「思いやる力」「リーダーシップ」「変化対応力」「自己管理能力」との回答が高かった。講義科目では、「分析力」「思考力」が高かった。同じ科目で複数クラスあるものを比較するとかなり違いがある。科目内容だけでなくクラスの雰囲気にも左右されると感じた。アクティブ・ラーニングの手法を取り入れることで、プレゼンテーション力が身に付いたと答える学生が増加した。学生の発表時間を設けたので「プレゼンテーション力」の向上が最も多くなった（食物栄養学科）。「思考力」の選択率が 48.4%で最多であった。このことは本科目区分が道徳や社会的・宗教的規範を教えるものでなく、当然のこととして学術的内容で構成されていることを裏付けると思われる。「思いやる力」の選択率が 19.7%と比

較的高い。このことは本科目区分が建学の精神を伝える役割を果たすことに一定程度成功していることを裏付けられる（キリスト教・同志社関係科目）。「思考力」の選択率が49.9%と最多で、「コミュニケーション力」の35.9%を上回っている。「コミュニケーション力」の数値がより高まることが望まれる。「プレゼンテーション力」の選択率が14.0%と比較的高く、話す力についても一定の成果が上がっていることがうかがえる（外国語科目）。

【学生に対する質問意図】

DWCLA10の力の重要性を認識して、その獲得に向けた努力をしてほしいという願いが込められています。シラバスに記載されていた「力」と異なっても構いません。

（4）その他として記載された学科等からの報告抜粋

一部の科目について否定的な回答が見られるものの、全般的には、音楽学科の回答は全学平均を上回っているものが多い。個々の設問に関してもコメントをしておいたが、そのような否定的回答によって明らかにされる問題点を、これから教員個人個人がいっそう努力して、授業改善を行っていく必要があると考えている（音楽学科）。科目によるばらつきもあるので、教員間の連携を強めながら、教授法の改善策を共有していきたい。自主性・積極性を養うよう、学生のメンタル面を鍛える必要があろう（日本語日本文学科）。2年次「生物学実験」の復習を兼ねて、マナビーに「マッチの擦り方」「ガスバーナーのつけ方」「無菌操作の基本」動画をアップしたことについて、任意で役に立ったかを問うたところ、3.14（ややそう思う）という結果であった。想像よりは動画を見た学生が多かったことから、一定の効果はあったものと判断された。課題などが多かったり、時間が不十分だったりしたときに1-2名であるが不満の声が上がるように思われる。改善が困難な点もあるが、講義の話方や教材研究を更に深め、考える力を促す授業にしたいと考えている。学生実験において、全員出席の中全員が提出したが、未回答が3名いたことになっており、白紙回答があったと考えられる。そういう学生がいる、ということを理解しておく必要があると感じた。今回のアンケートは、質問項目が多すぎるように思う。また、学生に質問の意図が伝わりにくい質問もあった。今後の授業改善のため、学生が感じたことを自由記述してくれると非常に参考になるのだが、今回のアンケートは項目ごとの自由記述欄であったためか、ほとんど記入されていなかった。今後の授業の改善に繋がりにくいと感じた（食物栄養学科）。

まとめ

今年度より、新たに大幅な変更となった授業に関するアンケートについては、様々な評価や意見更には批判があることかと思えます。とはいえ、どのような評価基準であれ完全無欠なものなどはなく、ある基準を選択すれば別の基準が失われます。更には、評価は決して絶対視すべきものでもありません。どのような評価も、ある特定の基準から下されたものに過ぎず、常に別の異なる基準がありうることを忘れるべきではないでしょう。

このため、評価は下された結果そのものよりも、その結果をどう受け取り、いかに対処するかが重要となります。特に授業評価の目的は、授業内容の良し悪しを測るものではなく、

より一層の改善を促すことに他なりません。したがって、もし仮にある基準で高評価の授業があったとしても、別の基準であったならば同じ評価が得られるだろうか、との正しい意味での批判的精神を持ち、より良い授業に向けた改善の可能性を探って行くことが求められます。そういった意味で、今回のアンケートの見直しによって新たに加わった項目は、必ずしもこれまで考えて来なかった改善の可能性に目を向ける機会になると考えています。実際、各授業担当教員一人ひとりのコメントをはじめ、各学科・科目区分責任者からいただいた授業評価報告のなかに、新たな授業改善につながる数々の視点や方向性が含まれていました。

授業評価は、ともすれば社会要請などを受け否応なく実施されているものとの消極的な認識が、現在でも大学関係者の間に少なからず共有されている感は否めません。むしろ、そうした認識は、必ずしも否定できない状況があることも事実です。しかし、どのような理由によるものであったとしても、実施することが目的として終わりにするのではなく、授業改善のための検討材料として活用して行くことが求められることに疑いありません。それこそが授業評価の本来の趣旨であり、また授業を履修しアンケートに回答していただいた学生諸姉に対する責務でもあると考えています。

<凡例>

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学学科科目	L	人間生活学学科科目
J	情報メディア学学科科目	S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
K	国際教養学学科科目	S K	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
G S	社会システム学学科科目	共通	共通学芸科目
G K	現代こども学学科科目	キ・同	キリスト教・同志社関係科目
Y	医療薬学学科科目	外国	外国語科目
K G	看護学学科科目	スポ・健	スポーツ・健康科目
E	英語英文学科科目	教職	教職科目
N	日本語日本文学学科科目		